



SAKURA∞SAKU

first no.001

「愛だの恋だの、興味はねえ」

そんなカッコいい理由じゃねえんだよ

好きになって、信じて。
裏切られて傷つくのが怖い

そんなカッコ悪い理由

恋をする勇気もないから
男なんていらねえ

それに今更

乙女に戻るつもりもねえ



9割説明不足

…………まあ、あれだ。うん。

『いっすよー』なんて
軽く返事した私がいけなかったのか…？

とにかく…

恨むぞ旦那！！！！

(さて…どうしたもんかね。)

目の前には5人の男達。
揃いも揃って顔まで整っていやがる。

「「……………」」

「……………」」

そして無言！！

これは気まずい。
空気が重い。
今にも押しつぶされそうだ。

(誰か…)

誰か助け舟を宜しくお願いします。

「え、えーと。他に何か注意事項とかありますか？」

誰も助けてくれないので自分で援護してみた。

「--特にねえな。」

「そ…っすか」

ちなみになんでこんなことになっているかというところ…
事の発端は2週間前。

わたくし、坂本 有希。

年齢は自称永遠の二十歳。

『何歳なのー？』と聞かれれば

『もう忘れました〜』と答える中途半端なお年頃っす。

趣味の延長になんとか実を結びつけ、PCを駆使してこじんまりと仕事をしている次第であります。

まあ、カッコ良く言えばIT。

リアルを言えば自宅で引きこもりというわけすな。

そんな私にちよい先日、公私共にお世話になっている不動産屋の旦那さんが声をかけてきた。

なんでもお願い事があるらしい。

そしてろくに内容の確認もせず二つ返事。

「いいっすよー」

軽くアルバイトを引き受けてしまった。

内容かというと旦那が管理する物件の管理人。

---楽勝だな

なぜなら私の仕事は家でPCと睨めっこしていることがほとんど。

比較的自宅に引きこもった生活をしているので、愛するPC群とネットが繋がる環境であればどこだろうが仕事ができる。

その生活を崩すことなくお給料を頂ける？
なんてステキなバイトなんだろう。
ウハウハが止まらない。

今思えば・・・

奴にとって私は都合の良いカモだったに違いない。

旦「なんでか分かんないんだけどね？この桜館っていう物件の管理人が長続きしないのよ。老若男女雇ってみただけだねえ。ほとほと困っちゃってさ。」

「管理人？なんか大変そうですね。」

旦「内容は簡単なんだよ？」

「？」

旦「家が壊されないよう見ていてくれればそれだけでいいんだよ。条件も良いと思うし、アルバイト希望者の食いつきはいいんだけどさ。」

「壊されるって・・・一体何が住み着いてんですか。」

旦「例えだよ例え。ここ、結構な豪華物件でさ。持ち主から管理人をつけて欲しいって言われてるってわけ。」

「ふーん。」

且「なのにはほら不思議。なぜか皆すぐ辞めちゃうんだよねー。」

見てみろいと言わんばかりに突き出される分厚い書類。
興味は無いがとりあえず手にとってみる。

「なんすかこれ。」

且「歴代桜館の管理人。一昨年からの。」

一昨年から？

おいおい一体何人歴代がいるんだよ。

え、勤務日数3日…？

3日ってあんた。

あ、1日って奴もいるんですけど。

ばらばら捲っただけで勤務1週間以内の人を多数発見。

もしや…いやいやこれは正に---

「こ、ここってまさかのまさか幽霊屋敷？実は庭に大きな桜の木が立っていて…その根本にはヒトリ、フタリ、サンニン…」

且「そんな報告一度も受けてないよ。」

「ほんとか？」

「そこでさあ有希ちゃん。チラッと管理人頼まれてくんないかなあ。」

「え、私ですか？なんで。」
且「有希ちゃん凶太そうじゃん。」
「……………」

悪びれる様子も無くサラッとされると

全然腹も-----立つ。

且「部屋も角部屋！広さも十分！そしてなんと！！次回の飲み会、俺が奢っちゃうから！！」
「えっ！マジで？よし乗った！いいっすよー！」

何を隠そう『次回の飲み会』にグラッときた。
やったーラッキーなんて思った。

且「おおー！！有希ちゃんならやってくれるって信じてたよー！」
「調子いいなあ。あはははっ。」

あははは、じゃない。
笑ってる場合じゃないだろあの時の私。

何が次回の飲み会だ。

一年分…
いや10年分奢ってもらっても足りないんじゃないのかこれ。

(あんのヤロー---！)

適当にも程があるだろ旦那。九割説明不足だ。

「「……………」」

「……………」

ふと現実に戻ると相変わらず沈黙地獄から抜け出せない。

人間が6人も集まってるのに…
なんなんだこの気まずさは。

---カサッ

皆さんの目の前で失礼かと思いますが、とりあえず旦那から
もらった頼りない資料をもう一度見つめ直してみようと思
う。

ぞ丁寧にパンフレットのように綺麗に綴られているそれ。

『桜館へようこそ！』

今となってはワザとらしい表紙。

ほとんど目を通してこなかった資料を隅から隅までガン見す
る。

(……………)

くそ…やっぱり書いてないじゃねえか。